

令和 元年 6 月 7 日現在

機関番号：32607

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07078

研究課題名(和文) 民間の単科精神科病院に勤務する新人看護師への離職予防支援

研究課題名(英文) Support for preventing job separation among new graduate nurses at private psychiatric hospitals

研究代表者

瀧下 晶子 (TAKISHITA, AKIKO)

北里大学・看護学部・助教

研究者番号：00803420

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、民間の精神科病院に新卒で入職した2年目の看護師8名に、入職後の看護の体験について聞き取り調査を行った。

新人看護師たちは、日々のケアの中で患者からの暴力・暴言への対応に苦慮していること、患者と信頼関係が築けず徒労感を感じていること、先輩看護師のように上手く患者と関われない悩みなどについて語った。また、一部の民間精神科病院では、看護師と看護助手の2名体制で夜間勤務を担っており、その負担感や患者の身体および精神症状の悪化に伴う対応への自信のなさを抱えながら誰かに相談する機会も持てないまま、勤務を続けていたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の民間精神科病院では、新卒で入職する看護師が少なく准看護師が看護構成員の一定の割合を占めてきたが、近年の准看護師育成教育機関の減少に伴い、人材の確保が難しくなりつつある。慢性的な人材不足のこの傾向は、現任教育の整備の遅れ、教育を担うマンパワーの不足など様々な課題につながっていると考えられる。これらをふまえ、精神科看護を目指した新人看護師たちが、精神科看護への関心を失うことなく勤務を続けることが出来るような支援方法を検討できれば、日常的な看護の充実感や早期の退職予防につながるのではないかと考えた。以上の点からこの研究成果は臨床的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Eight secondly-years nurses working at private psychiatric hospital were interviewed about psychiatric nursing experiences. These new graduate nurses experienced difficulty for coping with violence and abuse from patients, suffered from a sense of futility caused by not being able to establish rapport with patients, and couldn't care patients as senior nurses do.

In addition, some of them were working with a nurse's aide on the night shift at some of private psychiatric hospitals. Therefore, they were not confident about having the heavy workload and the difficulty of handling worsening of patients' symptoms. And they had kept working without opportunity to ask anyone's advice.

研究分野：精神看護学

キーワード：民間精神科病院 新人看護師 離職予防支援 精神科看護の体験

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1950年の精神衛生法により民間の精神科病院は急激に増加し、現在でも9割近くが民間の精神科病院である。このような精神科病院では、医療法で制定されている精神科特例に基づき一般病床に比べて少ない看護人員でケアを担っている現状がある。また、民間の精神科病院では、准看護師や看護助手として勤務したのちに看護師資格を取得するなど多様な背景を持つスタッフが多数いる。そのためスタッフ教育の対象を焦点化して研修プログラムを作成することや、集団教育を実施することは難しい。しかしこうした現状のなか、民間の精神科病院は独自に新人看護師を採用しようと努力している(片岡ら, 2015)が、依然として離職率は一般病院に比べ高いままである。

2004年に行われた厚生労働省の卒後看護師への離職率調査により、その高さが注目を浴び、一般診療科に働く看護師を対象にリアリティショックへの適応やストレス緩和などに関する研究が行われてきた。その一方で、精神科領域では新人看護師を対象とした調査はあまり見当たらない。その中で、新人看護師のジレンマに焦点を当てた研究(日下部ら:2012)や、臨床に適応していくプロセスを明らかにした研究(岩瀬ら:2011)、離職予防のために院内で独自にプログラムを行った報告などがある(高橋ら, 2011; 宇良ら, 2015)。しかし、実際に新人看護師を対象に離職したいと思ったきっかけなどについて具体的に聞き取り調査を行ったものはなかった。そこで前研究は、同時期に新卒として入職した1施設6名の看護師を対象とし聞き取り調査を行ったが、民間の精神科病院では、病院の規模や看護師の教育背景など施設により違いがあり、複数の施設で同様の調査を行う必要があると考えた。

2. 研究の目的

民間の精神科病院で働く新人看護師がどのような精神科看護の体験をしているのか聞き取り調査を行い、精神科看護に携わり続けるためにどのような支援が必要かを検討する。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

質的記述的研究

(2) 研究対象者の選定

関東圏内の卒後看護師を採用している民間の精神科病院3施設から研究参加者を選定した。看護部管理者から、看護基礎教育修了後に新卒で入職した2年目の看護師の紹介を受け、研究の趣旨に同意し、研究参加への承諾を得られた8名を対象とした。

(3) データ収集方法

データ収集は2018年7~8月に1名につき1回約60分のインタビューを行った。インタビューでは精神科病院に就職後から今までの経験の中で、印象に残っている場面とその理由や、やりがいを感じた場面とその理由、辛さや限界を感じた場面とその理由、精神科看護を行う上で大切にしていることや、そのきっかけについて聞き取りを行った。インタビュー内容は、研究参加者の承諾を得たICレコーダーに録音し、インタビュー内で語られた内容のみを分析の対象とした。

(4) データ分析方法

インタビューデータから逐語録を作成し、新人看護師の体験とそれに関連する要因をすべて抽出し、内容の類似点および相違点に基づいてカテゴリを作成し内容を分析した。分析は研究者間で確認を行いながら実施し、一致が得られるまで推考することにより妥当性を高められるよう努めた。

(5) 倫理的配慮

研究者の所属する施設の倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:29-11-3)。研究参加者には、研究計画書に基づき研究の趣旨、参加は自由意思であること、不参加や中断による不利益はないこと、録音した内容をデータ化するには連結可能匿名化を行うこと、結果を公表する際には個人が特定される記載はしないことを書類を用いて口頭で説明を実施した。その後、研究参加者へ研究協力承諾書を渡し、それへの記入により研究協力の同意を得た。

4. 研究成果

(1) 研究参加者の背景

研究参加者は、民間精神科病院3施設に勤務する看護基礎教育課程修了後に新卒で入職した2年目の看護師女性6名、男性2名であった。平均年齢は、23.4歳であった。勤務している病棟の種類は、精神科救急治療病棟、精神科急性期病棟、精神療養病棟、認知症病棟であった。

(2) 精神科看護への戸惑い

インタビューで最も多く語られた内容は、ケアの成果がみえにくいという精神科看護への戸惑いであった。その主な内容は、精神症状への戸惑い、自分の提供したケアに確信がもてない、患者との関係性をつくる難しさ、患者のゴールが立てにくい難しさ、などであった。

新人看護師たちは、患者と関わる方向性が見いだせずじたり、自分が行ったケアに確信がもてないまま日々のケアを担っていた。ある看護師は、「(患者との関わりに)何があっていて、何が間違っているかはないうわかってはいても、いつも何を言えばよいのか悩む」と語り、これでよいと思える機会が少ないと語った。その他にも、「ご飯を食べない患者さんにどこまで促して良いのかとても迷う」といった語りがあった。これらからは、新人看護師同士や、先輩看護師にケアの経験を語ってみるにより、精神科看護の特徴と難しさに触れることができ次のケアへ生かすことが出来るのではないかと考えられた。

(3) 民間精神科病院の勤務環境

民間精神科病院の勤務体制として、看護師と看護助手の2名で夜間勤務を担っている病棟がある。今回の研究参加者のうち5名がそのような病棟に配置されており、夜勤帯特有の不安の高まりがみられていた。例えば、「身体管理が必要な患者さんがいても、何かあったときどうすれば良いかわからない」、「患者さんが大声で怒りだしてしまったときに、何とかしないとって・・・」といったように、身体症状や精神症状の悪化に対する不安や戸惑いがあった。さらには、人手が少なくなる夜間帯には「こんなこと、相談してもいいのかと毎回迷う」と語られたように、どのような時に誰に相談してよいのか、判断が難しいとのことであった。これらの結果からは、新人看護師の不安を軽減し、安心して夜間勤務を担えるように、夜間帯の相談体制を整えること、またそれを明確に示すことが必要だと考えられた。

(4) 離職を踏みとどまる

離職を考えた体験として語られたのは、新人看護師自身が患者からの暴力や暴言の対象となり、深く傷ついたときであった。ある研究参加者は暴力を受けた後、「これから看護師としてやっていけるのかと悩んだ」と語った。この語りが見出すように、暴力や暴言を受けるということは、日々のケアのなかで「これでよい」と思えることの少ない彼女たちにとって、看護師としてのアイデンティティをゆるがすほどの出来事であった。このような体験をどのように乗り越えたかは、それぞれ方法は異なっており、インタビューした時点でもまだ消化できていない研究参加者もいた。そのため、「(患者さんのことを)怖いと思うことも沢山あるけれど、なんとかフレンドリーに接している」、「(暴力を受けた患者さんからは)目を背けて、逃げたい気持ちになっていたから、他の患者さんと沢山関わって、そのことを考えないようにしていた」というように、日々の患者との関わりに怖さを感じながらも、日々の業務を担うためになんとか乗り越えようとしていた。

また、暴力や暴言を受け、離職を考えながらも勤務を継続していた要因として、「周りの先輩と一緒に振り返ってくれた」、「その患者さんと関わらなくて良いように配慮してくれた」といった先輩看護師たちの親身な対応があげられた。その一方で、ある看護師は「自分の中で整理するのに時間が必要だったけれど、先輩と振り返る中で、自分が悪かったのかな、って・・・」という語りもあった。そのため、振り返りを行う時期や方法によっては、新人看護師をより一層追い詰めてしまう可能性も考えられた。先に述べたように暴力や暴言を受けた経験の乗り越え方や、乗り越えるために必要な時間は様ではなく、それぞれの新人看護師の受け止め方に沿った支援が必要であると考えられた。

(5) やりがいを見出す

インタビューの内容の多くが、これまでの辛い体験や、これで良いと思えない体験の語りであった一方で、看護師としてのやりがいなども語られた。それは、患者との関わりの中で見出した楽しさであったり、精神症状に対応できるようになってきた手ごたえ、患者との関係性を深めることが出来た感覚、といったものであった。

ある看護師は「前は幻聴や妄想を言われるとどうすればいいかわからなかったけれど、今は対応が出来るようになってきたかな」と語っていた。そのほかに「患者さんが話かけてくれると嬉しい」という語りもあった。このことから、(2)で述べたような上手いかわないケアの体験のみならず、やりがいを感じることも出来た経験に関しても、新人看護師同士や先輩看護師と語り合い経験を共有することによって、精神科看護師としての看護の方針をみいだす助けとなり、精神科看護に携わり続ける動機付けにもなり得るのではないかと考えられた。

<引用文献>

岩瀬貴子, 畦地博子, 田井雅子, 富川順子, 福田亜紀, 中平洋子他(2011). 精神科新人看護師における基礎教育から臨床への移行過程の様相. 高知女子大学看護学会誌, 36(1), 31-42.

片岡睦子, 宮川操, 桑村由美, 安原由子, 谷岡哲也, 三船和史(2015). 四国地方における精神科病院の新卒看護師採用に関する実態. 四国医学雑誌, 71(1,2)23-28.

日下部祥子, 桑名行雄(2013). 精神科新人看護師が体験するジレンマとそれへの対処. 大阪府立大学看護学部紀要, 19(1), 21-29.

日本看護協. 新卒看護職員の早期離職実態調

査.<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/03/dl/s0329-13b-5-3.pdf>.

高橋寛光,北野進,石川博康,木田ゆかり,中田信枝.(2011).精神科病院における新人看護師の離職防止に対する介入とその効果.日本精神科看護学会誌,54(2),161-164.

宇良俊二.(2015).精神科新卒看護師の職場適応への支援 離職防止の支援を行って.日本精神科看護学術集会誌,58(2),151-155.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

瀧下 晶子,出口 禎子.民間精神科病院に勤務する新人看護師の経験のあり方.第23回一般社団法人日本看護研究学会東海地方学術集会.2019.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名: 出口 禎子

ローマ字氏名: DEGUCHI SACHIKO

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。